

県外派遣報告書（インカレ）

令和元年12月14日（土）

報告者：隈元 ゆみこ

日 程：令和元年12月10日（火）～12月12日（木）

会 場：エスフォルタアリーナ八王子、駒沢オリンピック公園総合運動場体育館

大会名：全日本大学バスケットボール選手権大会

◆担当ゲーム

① 女子 1回戦 16：30～ 北陸大学 対 専修大学

CC：隈元 U1：古後宏和氏（福岡 A 級） U2：稲田篤氏（鳥取 A 級）

② 女子 2回戦 11：30～ 白鷗大学 対 桐蔭横浜大学

CC：隈元 U1：近藤巧氏（北海道 A 級） U2：本間さとみ氏（東京 A 級）

③ 女子 準々決勝 13：10～ 早稲田大学 対 愛知学泉大学

CC：中江洋美氏（本部 S 級） U1：隈元 U2：稲田翔人氏（東京 A 級）

◆PGC①②（隈元 CC）

- ・クルーでのテーマについて（ベーシックなメカ、シンプルな判定、処置ミスゼロ）
- ・課題について（アクティブリード、チェックイン／チェックアウト、POC、デリバリースキル）
- ・映像配信があるということ。（デリバリースキル、プレゼン）
- ・チームの特徴について（キーマン、プレイスタイルなど）
- ・テーマ、課題に取り組むために映像を使っての確認。アクティブリード、チェックアウト（L ローテーション完了後の C→T）、POC、プライマリ、エッジより下での 3P ショット、EOQ/EOG、REF-D（今回のゲームで起こりそうなものを Pick Up）などを確認。
- ・コーナーでのショットに関して、L、T プライマリの確認
- ・TO に関して（ブザーとクロックが連動していないこと、表示物に関してなど）
- ・クルーワーク、ガイドライン、UF のクライテリア、新ルールについて確認。
- ・L のローテーションについて（L が主導権を持つこと、ゾーンの際のローテーション）
- ・大学4年生にとっては集大成の大会なので、3人で協力して、最後の0：00までしっかりレフェリングしようとして臨んだ。

◆PGC③（中江氏）

- ・インカレとは
- ・ゲームをしっかり終わらせるために、審判として取り組むべきこと。
- ・TO との協力（コミュニケーション、TO へのリスペクト含め）
- ・ベーシックなメカについて
- ・ガイドラインについて
- ・クルーワーク（オールコートカバレッジ、時計の管理など）
- ・ドライブに関するプレイの見方（W リーグでの一場面を使って）

◆ゲームの実際①

北陸大学は、1期生である4年生が集大成の大会ということもあり、最後まで粘り強いディフェンスとパスワークからの積極的な攻撃を続け、点差を感じさせない最後までアグレッシブなゲームであった。

特に大きなこともなく、3人で協力してゲームを進めることができた。途中、自分も含めて、ローテーションのタイミングが遅れてしまったために、スイッチサイドできない場面がいくつかあり、コミュニケーションを図りながら修正できた部分は良かった。力の差がある分、北陸大学へのファウルが多くなってしまい、コーチは判定に対し、終始不満を持っている感があった。そんな中、3QでLから判定したりバウンドファウルに対し、「なんで？」と遠いベンチからアピールがあり、その場は、クルーが対応。その後、判定した私にもベンチ前に行った際に説明を求められる場面があった。簡潔に自分が見たものについて話しをしたが納得していない様子であった。話す内容やコミュニケーションの取り方について、伝え方の工夫が必要だと感じた。

◆ゲーム後のMTG①（インストラクター 山田巧氏）

Lのローテーションについて、Cが一人でプレイを捉えなければならない場面がいくつかあったので、そういう場面への対応が必要であった。また、いくつかのケースについて、ファウルをコールしてはいるが、プライマリを考えると誰が判定した方がよかったのか、もう少しCからの積極的な判定が欲しかった。プライマリとして判定したケースで、果たして必要だったかどうか、映像を見て再度確認。コーチの「なんで？」というアピールに関しての対応は、今回については特に対応せず、そのまま進めて良い場面。必要以上にコミュニケーションを取りに行く必要はない。

◆ゲームの実際②

関東同士の対戦。前日の反省であったLのローテーションを特に意識して臨んだ。クルーは、昨年それぞれ一緒に担当させていただいたメンバーということもあり、コミュニケーションも取りやすく、ゲーム中も情報交換をしながら進めていくことができた。ゾーンの際のローテーションについては、パイプを少し広げるイメージでというPGCであったが、実際のゲームにおいては、広げるイメージを持ちつつ、早めにストロングサイドを作る方が良いという判断のもと、修正できたことは良かった。白鷗の留学生に対するディフェンス、2人、3人とディフェンスが密集するペイント内でのLのアングルの取り方、C、Tの参加などに課題が残った。2Qのブレイクの場面で、Tが判定したトラベリングに対し、「Oステップではないか」というベンチのアピール。判定したTが対応し、コーチにワーニング。その後、アシスタントコーチがさらにアピールしてきたため、TFを記録することとなった。クルーワークとして、ボールステイタス、時間、シューターの確認など協力してできたことは良かった。ショットクロックの成立やタイマーが動いていなかった場面、ファウル表示等についても、クルーとして対応できたので良かった。ゲーム自体は勝敗が早い段階で決まったが、桐蔭横浜が最後まで持ち味を発揮し、後半は同点という内容であったため、最後まで良い緊張感を持って臨むことができた。

◆ゲーム後のMTG②（インストラクター 山田巧氏）

ゲームコントロールというところがこのゲームでのキーであった。その中で、留学生に対するディフェンスへの判定は、いくつかのケースについて映像で再度確認する必要がある。その際のLの位置やアングルの取り方、C、Tの参加についても検証すべきである。密集地帯に対して、トライアングルが大きくなってしまっている場合は、良い判定につなげることができない。プライマリでの決断力を持つこと。（本来は誰が吹くべきだったのか、感じてはいるが、セカンドで吹かれてしまっているケースについて。）OOBの協力についても、もっとスムーズに。テンポ（リズム）も大切。トラベリングの判定に関しても、しっかりと確認をした上で自信を持った判定につなげること。ゲーム後にアシスタントコーチが映像を持って質問してきたことに対しては、きつ

ぱりと断るという対応をすること。

◆ゲームの実際③

1会場メインコートとなり、ベスト4をかけたゲームということで、前日までとは違い、両チームの攻防の激しさも、ゲームレベルも上がり、ダイナミックなバスケットが展開された。出だしから愛知学泉が良いゲームの入りをし、10点以上のリードを奪ったが、2Q以降は早稲田もリズムを取り戻し、激しい攻防が続いた。3Qで早稲田の選手が負傷してゲームが中断した際の対応について、色々考えたものの、その場ですぐにはCCメンタリティを発揮し、実行に移すことができなかった。判定については、良くも悪くも今の自分が出たかと感じた。もっとプレイの全体を捉えて、判定につなげることができるよう、普段経験のできていないゲームレベルやフィジカルレベルが上がった時のプレイの見極め、決断力についてはもっと勉強しなければならないと痛感した。CCの中江さんが終始クルーやTOに気を配って、いろいろな声かけをしてリードして下さったことで、無事にゲームを終わらせることができた。こういったリードの仕方もあるんだと体感することができ、大変勉強になった。

◆ゲーム後のMTG③（クルーMTG）

負傷者への対応について、負傷者の所に2人で対応してしまったことがまずかった。残った一人も、時間がかかりそうであったので、選手を両ベンチに戻すなどCCメンタリティを発揮する場面ではなかったか。もう一つは、CCが負傷者に対応しているU1のところに来てくださったので、U1としても2人で対応するのではなく、CCにその場を任せて、両チームへ対応するなど、CCメンタリティを発揮すべき場面であった。

メカが崩れてしまったケースについては、原因としてチェックアウトが不十分であったことが挙げられた。判定についても、決断ができず、セカンダリーとして判定してもらい助けてもらった場面があったので、プライマリとしての決断力が必要であった。

良い判定もあったので、今回の経験を次に繋げていくことが大切。

◆全体を通して

インカレは、4年生の大学における集大成の場。そういう場を3試合も経験させていただけたこと（うち2試合はCCとして）は、うまくいったこともうまくいかなかったことも全て含めて、私にとって本当に貴重な経験となりました。会場の雰囲気含め、ゲームレベル、フィジカルレベルが上がったゲームにおける見極めや決断力、CCメンタリティなど、まだまだ足りないことだらけの自分の現実を思い知らされました。そういったことを感じることは、その場を経験しなければ得られないことでもあるので、これからもそういった場を求めて、力をつけていく努力をしていかなければ、次の目標達成へ向けては、かなり厳しいものとなります。そのためにも取り組み方の工夫がもっとも必要です。まずは、今大会3試合の映像を見て、自己分析をしっかりとし、次につなげるためにどうすべきか、しっかりと反省し、課題解決に向け、目の前の一つのゲームに真摯に向き合っていきます。

今回の派遣にあたり、大変お世話になりました全日本大学バスケットボール連盟の皆様、そして、派遣に際し、ご配慮いただきました原田審判委員長をはじめ鹿児島県審判委員会の皆様に感謝し、報告といたします。ありがとうございました。